

## 『分析論前書』 B 21における「知と不知」の問題

## —アリストテレスによる『メノン』注解—

河谷 淳

## 第一節 本論考の対象と目的

アリストテレスは『分析論前書』第2巻第21章と『分析論後書』第1巻第1章（以下ではそれぞれを『前書』B21、『後書』A1と略記する）においてそれぞれ一度ずつ（67a21, 71a29）プラトンの『メノン』篇に明示的に言及することがある。本論考では主に『前書』B21の文脈に軸足を置きながら、その箇所であリストテレスがいったい何を問題としており、そして、そこでの自らの議論を展開するにあたって当該の問題をどのように利用しながら、その問題に対していかなる応答を・いかなる意図のもとになしているのかを論じることにはしたい<sup>1</sup>。

さて、アリストテレスは、『前書』B21の知と不知の共存可能性を論じる文脈で、『メノン』において「探求のパラドックス」への解決案として提示された「想起説」に対して次のような評価を下している。

T1：「学習とは想起である」という『メノン』における議論の場合も事情は同様である（*ὁμοίως δὲ καὶ ὁ ἐν τῷ Μένωνι λόγος, ὅτι ἡ μάθησις ἀνάμνησις.*）。というのも、個別的なものを事前に知っているということが帰結するのでは断じてなく、エパゴゲー（*ἐπαγωγή*）<sup>2</sup>と同時に、部分にかかわる知識をあたかも再認識するかのよう（*ὡσπερ ἀναγνωρίζοντας*）把握する、ということが帰結するのである。というのも、たとえば、三角形であることを見て取った場合に、それが二直角であることを直ちに知るように、私たちはあることがらを直ちに知る場合がある。（67a21-25）

<sup>1</sup> ギフォード（Gifford）は、プラトンの『メノン』に言及する『前書』B21と『後書』A1の議論をまったく異なる問題意識のもとにあるものとした上で、それらを並行的な議論として読むことに留保をつけている（p. 2 *et passim*）。本論考ではそれら二つの議論を相互参照しながら読むことを最初からは否定せず、それら二つの文脈の異同という問題そのものをひとつの検討課題とし、この問題については本論考での議論を進めていく中で考えていくことにしたい。

<sup>2</sup> この文脈における「エパゴゲー」をどのように訳すべきなのかは、ここでなされている議論をどのように解釈すべきなのかという、内容理解にかかわる、より大きな問題に依存しているため、ここではこの語をあえて訳さないでおくこととする。その内実については本論考での議論を進めていく中で考えていくことにしたい。

この箇所をめぐるのは、まず古註としては六世紀のピロポノスが「プラトニスト」の立場から、アリストテレスはここで「想起説」批判を行っているとの趣旨のコメントを付しており<sup>3</sup>、そして、二十世紀の注釈家であるロスもまたこの箇所をアリストテレスによる全面的なプラトン批判として理解している。こうした『前書』注釈家による解釈を「伝統的な解釈」と呼ぶこととし、ここで、ひとつの叩き台としてロスの解釈をその典型として以下に掲げておくことにしよう。

A. (=Aristotle) does not draw Plato's conclusion; no previous actual knowledge, he says, but only implicit knowledge, is required; that being given, mere confrontation with a particular case enables us to draw the particular conclusion.<sup>4</sup> (下線ならびに括弧内の補いは筆者による)

先に引用した『前書』B21の当該箇所(T1)では「個別的なものを事前知っているということが帰結するのでは断じてない」(67a22-23)と述べられており、そこでアリストテレスが先行する現実的な知の存在を明確に否定していることから、ロスはこの議論を、プラトンの「想起説」に対するアリストテレスによる全面的な批判とみなしているわけである。ここで言われている「個別的なものを事前知っているということ」が「想起説」の立場を意味しているのだとすれば、ロスの解釈も一定の説得力を持つものとなるだろう。

今、この箇所で問題となっているような認識の対象をともかく X と措くならば、ここでロスが想定している「想起説」とアリストテレスの立場との対比は次のようなものとなるだろう。

想起説：Xを知るためには、事前に X を現実的な仕方で知っていたのでなければならぬ。

アリストテレス：Xを知るためには、X を潜在的な仕方で知っているものでなければならぬ。

知のあり方に関する「現実的／潜在的」という対比が『前書』・『後書』の中で明示的に語られる箇所としては、『後書』A 24, 86a25-29において知のあり方に関していわゆる「現実態／可能態」という区別が語り出される箇所が考えられるが、今ここで考察対象としている『前書』B21ではそうした区別が明示的に語られることはない。ここでロスの理解に従うのであれば、アリストテレスは『前書』B21のこの箇所でも伝家の宝刀の「現実

<sup>3</sup> ピロポノスはその注釈において、プラトンが「学習は想起である」ことを主張し、アリストテレスがそれを否定していると述べる一方で、「私たち」もまたそのような「想起説」を認める旨を表明している(464, 25-465, 2)。

<sup>4</sup> Ross p. 474.

態／可能態」という区別に訴えることで明確にプラトン批判を行っていることになる<sup>5</sup>。

しかしながら、こうした「プラトン対アリストテレス」という図式をここに読み込む伝統的な解釈がある一方で、先ほどの引用箇所（T1）における「あたかも再認識するかのように」（67a24）というアリストテレスのギリシャ語表現に着目するのであれば、その動詞がアリストテレスの現存テキストにはそれほど頻出しないう語であるためその動詞に込められたアリストテレスの含蓄を付度することは難しいものの<sup>6</sup>、プラトンの「想起（アナムネーシス）」というモチーフがこの文脈では好意的に受け取られているという読みも十分に成立しうる。実際に、ギフォードの解釈を承けてブロンスタイン（Bronstein）やファイン（Fine）がこの箇所をそう解するように、ロスのような伝統的な解釈に反して、アリストテレスの立場がプラトンの立場とも親和的であるとの解釈を採る最近の（二十一世紀の）研究論文があることもまた事実である<sup>7</sup>。

たとえば、ファインは、『メノン』において「想起説」が持ち出されることの意図はいわゆる「潜在的な・暗黙の知」（latent knowledge）によって「探求のパラドックス」を解決することにあるのではないとの彼女独自の立場から、プラトンによるパラドックスの謎解きの真意はあくまで、真なるドクサ（true belief）からの探求の可能性を主張することにあるとした上で、その点に関する限りでは、アリストテレスはプラトンを全面的に批判しているのではなく、むしろ、そのようなモチーフを継承している可能性があること示唆している<sup>8</sup>。

ここで、「想起説」に対するアリストテレスのスタンスに関していずれの解釈の方向性を探るのであれ、『メノン』篇を引き合いに出す際のアリストテレスの意図を探ることを本論考の問題として設定するにあたり、どのような解釈の可能性があるのかについて予備的な問題整理をしておくことは意味のあることであろう。そこで次節では、上述の問題を考えるための予備問題として、「アリストテレスがプラトンをどう読んだか」を私たちが読むためのアプローチの問題について考えておくことにしたい。

<sup>5</sup> ただし、『メノン』において想起の実験台となる「奴隷の子」が倍積問題の答えそのものを解答する前から「潜在的に」知っていたと言いうるのであれば、両者の差異はそれほど大きいものではなくなる。

<sup>6</sup> 『前書』B21からの引用箇所（T1）で、もし「あたかも再認識するかのように」ではなく「あたかも想起するように」と述べられていたのであれば、プラトンとアリストテレス両者の親和性は自然な形で理解されるものとなったであろう。確かに、「再認識する」という語がプラトンの「アナムネーシス」という語に触発されて語り出されていることはありそうなことではあるが、ギフォードも指摘するように（n. 10）、「再認識する」と訳した動詞「アナグノーリゼイン」またはその名詞形「アナグノーリシス」は（これは、文字通りには、ラテン語を経由して‘recognition’という近代語につながるギリシャ語だと言えようが）アリストテレスの現存テキストには頻出しないう語である。その用例が集中するのは『詩学』第11章、第16章であって、たとえば、『オイディプス王』においてオイディプスが自分自身の本当の素性を「知る」ことがそれにあたり、しばしばそれは単に「認知」と訳される。

<sup>7</sup> 『前書』B21をその直接の論考対象としているものではないが、アリストテレスが『後書』において『メノン』を積極的な仕方で継承しているとの解釈を提示している邦語論文としては、たとえば、田中論文がある。

<sup>8</sup> Fine p.69.

## 第二節 「アリストテレスがプラトンをどう読んだか」をどう読むべきか

『前書』B21・『後書』A1の当該箇所ではアリストテレスが何を問題にし、それに対して、いかなる解決案を提示しているのかを考える上で、ひとつの軸となる解釈の可能性は三つある。それは、すなわち、アリストテレスはここで「想起説」を(1)全面的に批判している、(2)部分的には容認しているが、部分的には批判している、(3)全面的に容認している、の3つである。プラトンにしてもアリストテレスにしてもとにかく「探求のパラドックス」をそれぞれの仕方で解決または回避しようとしている点ではお互いにその目的は同じなのであるから、本論考が想定している解釈はさしあたり(2)の解釈となるが、(1)や(3)の場合とは異なり、その場合には様々なヴァリエーションがありうることは容易に想像できよう。

さらに、『メノン』のパラドックスならびにその応答としての「想起説」をめぐるプラトンの議論を(他の案件でもしばしばそうであるように)アリストテレスが正当に理解しているとは限らないのであるから、(1)・(2)・(3)の解釈のいずれかを選択するにあたっては、第一の解釈軸に加えて、より根本的な解釈軸として、アリストテレスがプラトンの議論を(A)正当に理解している、(B)誤解している、といった2つの場合の可能性を考慮に入れる必要がある。したがって、実際にはA3やB1またはB3といった組み合わせはいささか想定しづらいものの、当該箇所の解釈をめぐる基本的な組み合わせを合計すれば、少なくとも $2 \times 3$ の都合6通りの可能性があることになる。この場合分けに従うならば、たとえば、先ほど紹介したロス立場はA1として同定することができよう。

しかしながら、『メノン』において「探求のパラドックス」に対して提出された「想起説」をどのように理解するのがそもそも「正しい」解釈なのかという問題に踏み込むことは、さまざまなプラトン解釈の是非そのものを競うことになるが、あくまでアリストテレス解釈に焦点を当てる場合には複雑なパラメーターをそこに持ち込んでしまうことになってしまう。したがって、「探求のパラドックス」の定式化の問題(メノンによるパラドックスの定式とソクラテスによる定式の異同の問題)、「想起説」がパラドックスに対する真の解決になりえているかどうか、さらには、プラトンがいわゆる潜在的な・暗黙の知を想定しているかどうかといった諸問題<sup>9</sup>に関して解釈を提示することは、それについて間接的に論じることはあってしかるべきだとしても、本論考における直接の目的とはしない。たとえそれがアリストテレスによる誤解・誤読なのだとしても、とにかく誤解もひとつの「解釈」なのだとすれば、アリストテレスが『メノン』のアポリアから何を受け取り、それに対してどのように応答したのかということが本論考における関心事であり、それを本論考における問題設定としたい。

そこで、次節以降では次のような手順に従ってこうした問題を考察することとする。ま

---

<sup>9</sup> See Scott pp. 75-125.

ず、『後書』A1も参照しながら、『前書』B21においてアリストテレスが念頭に置いているアポリアの構造ならびにその解決案のトポスを確認し（第三節）、次に、『前書』B21における議論の流れを具体的に検証した上で（第四節）、それを踏まえて、最後に、『前書』B21と『後書』A1の文脈の異同にも留意しながら、アポリアに対するアリストテレスの応答のさらなる含意を探ることにしたい（第五節）。

### 第三節 アリストテレス版アポリアの議論構造とそれに対する応答のトポス

アリストテレスが『メノン』のパラドックスを具体的にどのような論理構造を備えたものとして理解しているのかは、『前書』B21の記述からだけではそれほど明確ではないが、それは『後書』A1では次のような省略された簡潔な形式のもとで言及されている。

T2:もしそうでなければ〔個別の三角形が二直角を有することを知らる場合に、予めそのことを端的に知っていたのだとすれば〕、『メノン』におけるアポリアが帰結することになる。すなわち、人は、何ひとつとして学習することはなくなるか、あるいは、すでに知っていることを学習することになるかのどちらかとなる。(*εἰ δὲ μή, τὸ ἐν τῷ Μένωνι ἀπόρημα συμβήσεται ἢ γὰρ οὐδὲν μαθήσεται ἢ ἃ οἶδεν.*) (71a29-30)

ここで、アリストテレス版と『メノン』版のアポリアとを比較しておくことにすれば、a)「学習」と「探求」のどちらに力点が置かれているのかという点や、b)アポリアの語り方における選言肢の配列の順序などの点において違いがあるにはしても<sup>10</sup>、ここでのギリシャ語の表現が『メノン』におけるソクラテスによる定式(80e1-3)<sup>11</sup>を念頭に置いていることは、その表現の類似からしても明らかであろう<sup>12</sup>。そうだとすれば、アリストテレス版「探求のアポリア」(より正確には、「学習のアポリア」)は、ソクラテスの定式と同様に、以下のような構成的ディレンマの論理形式を備えたものとして想定されていることになる。(整理の便宜上、「知っている」をA、「学習の成立」をBで表記することとしてそれぞれの命題にそれを記号化したものを付した上で、さらに、全体を記号化したものを掲げておくこととする。)

<sup>10</sup> すなわち、アリストテレス版は、それが、a)「探求」ではなくもっぱら「学習」の可能性を問題にしている点、b)最初に「不知」の場合を問題にしている点において、『メノン』におけるソクラテスの定式とは異なっている。

<sup>11</sup> *ὁρᾶς τοῦτον ὡς ἐριστικὸν λόγον κατάγεις, ὡς οὐκ ἄρα ἔστιν ζητεῖν ἀνθρώπῳ οὔτε ὃ οἶδε οὔτε ὃ μὴ οἶδε;* (80e1-3)

<sup>12</sup> この点については研究者の間で概ね意見の一致が見られる (LaBarge p. 190, Bronstein p. 128, Fine p. 51)。

- (1) 人はなにかを知らないか、知っているかのどちらかである ( $\neg A \vee A$ )
- (2) 知らないならば、学習不可能 ( $\neg A \Rightarrow \neg B$ )
- (3) 知っているならば、学習不必要 ( $A \Rightarrow \neg B$ )
- (4) したがって、いずれにしても、学習不成立 ( $\neg B$ )

$$\begin{array}{c}
 (1) \quad \neg A \vee A \\
 \hline
 (2) \quad \neg A \Rightarrow \neg B \qquad (3) \quad A \Rightarrow \neg B \\
 \hline
 (4) \quad \neg B
 \end{array}$$

アリストテレス版「学習のアポリア」をこのような構成的ディレンマとして整理・分析できるのでとすれば、こうした論理形式を備えたアポリアを打ち破るために採るべき方法としては、前提となる (1)・(2)・(3) のうちで少なくともどれかひとつを論駁するという方途が考えられるであろう。

まず、一般的に言えば、構成的ディレンマを打ち破るための常套手段としては二つの角（選言肢）の間をすり抜ける方法が考えられるが、ここでの前提 1 は、それを文字通り受け取るならば、単なる選言ではなく、まさに排中律 ( $\neg A \vee A$ ) であるのだから、この二つの選択肢の間の第三の選択肢を模索することは特殊な論理学を想定しない限り困難であろう。また、それでも第三の選択肢を提示しようとして、「なにかを知っており、かつ、なにかを知らない」という可能性を主張するような場合には、もしその「なにか」にあたるものが同一の対象であるとするれば、それは強い意味での「自己欺瞞」（すなわち、同一人物がある事態  $P$  を知っており、かつ同時に、 $P$  を知らない、という事態）となり、その場合には明らかに矛盾律にも抵触するため、そのような事態は論理的にはありえないことになる。

そこで、もし前提 1 の適用を免れるような事態を有意味に語りうるとすれば、少なくとも次のような二つの場合が考えられる。その第一の場合は、前提 1 における知の対象としての「なにか」をその前半と後半とで全く異なるものとして理解する場合であり、たとえば一方の対象を  $P$ 、他方の対象を  $Q$  とするならば、その場合にはそれぞれの対象が異なる以上、「 $P$  を知らない」ことと「 $Q$  を知っている」こととは矛盾することなく同時に成立可能となる。また、第二の場合は、たとえ前提 1 における不知と知の対象が同一だとしても、「知らない」／「知っている」と言う場合の、それぞれの認知上のあり方・モードが実際には異なっていると主張する場合である。この場合には、知の対象は異ならないがその認知状態が異なるため、やはり同一の対象について二つの知のあり方が同時に成立可能となる。いずれの場合にしても、問題となるのは、知の対象の違いであれ、知のモードの違いであれ、その違いの内実と互いとの間の関係だということになるろう。

また、前提 2 あるいは前提 3 の論駁を試みるような場合でも、前提 1 の場合と同様に、知の対象または知のあり方の差異に訴えることでそれぞれの論駁が達成される余地がある。

たとえば、チャールズ (Charles) が彼自身の three-stage view による『後書』理解に立脚しながら示唆しているように、探求・学習の対象 (たとえば、「X とは何であるか」とそれに先立つ準備段階の知の対象 (「X は何を意味しているか」とがそもそも異なるのであれば、前提 2 または前提 3 は必ずしも成り立たないことになる<sup>13</sup>。あるいは、対象が同一である場合にしても、ここで問題となっている、「知っている」というあり方があくまで「可能的な」ものであるとすれば、まだ現実的には知らないのであるから学習は成立可能となり、その場合には前提 3 が論駁されることになり、他方でまた、現実的には知らないとしても学習は成立可能となるのだから、併せて前提 2 も論駁されることになる。

実際のところは後で確認するように、さしあたり『前書』B21 の『メノン』篇に明示的に言及する文脈に限って言えば、アリストテレスは同じことがらについて知と不知がある意味では共存しうることを認めており、かつ、「知っている」ということのモードをなんらか区別することでアポリアに対処しようとしているのだから、彼が『前書』B21 で取ろうとする道はさしあたり、知の対象の区別によってではなく、知の様相の区別によってアポリアを回避しようとしているのだと思われる。その場合に問題となるのはその区別の中身だということになる。そこで次節では、アリストテレスが『前書』B21 においてアポリアに対してどのように応答したのかを具体的に検討することとしたい。

#### 第四節 『前書』B21 における「学習のアポリア」への応答

『前書』B21 における議論を『メノン』と関連づけて理解するとき、見失われがちなのは、『メノン』篇への言及がある当該箇所テキスト (T1) が置かれている全体的な文脈がどのようなものであるのかという点である。確かに、『前書』全体あるいは第二巻における B21 の位置付けはそれほど明確であるとは言えないが、ともあれ、この章の出だしが「諸項の措定において私たちが錯誤に陥ることがあるように、判断に関しても錯誤が生じることになる場合がある」(66b18-19) となっていることから明らかなように、この章の主題は、さまざまなタイプの「判断に関する錯誤」の分類とその成立可能性の当否である。

そして、『前書』B21 において『メノン』篇への言及がなされるのは、「判断に関する錯誤」のうちでも「部分的なことがらに関する錯誤」(67a8-30) が語られる文脈においてであり、そこで挙げられているのは次のような具体的で特殊な推論である。(同様の推論は『後書』A1 にも登場し、そこでは、「半円に内接するこの図形は三角形である」

<sup>13</sup> この解釈は『後書』の全体的なプログラムの理解という、いわばマクロ的な視点からは賛同できる面があるものの、今ここで問題にしている『前書』B21 の当該箇所はこの図式を適用できるかどうかについては検討の必要があろう。また、『メノン』と『後書』の関係をめぐるチャールズの理解に対する批判ならびに対案の見通しとしては渡辺「序章」を参照。

(71a20-21)が小前提となっている<sup>14</sup>。)

大前提：あらゆる三角形は二直角を有する

小前提：この図形（感覚対象としての三角形）が三角形である

結論：この三角形は二直角を有する

この推論は、その小前提と結論に個別対象（この三角形）が含まれるため、『前書』で3つの格によって分類・体系化されるような純正な意味での「推論」とは呼べないが、緩やかな意味では妥当な推論だと言える。さらに、それに応じて、ここで問題となる「知識」にしてみても、『後書』の対象でありそのA 2冒頭（71b9-12）で、根拠ならびに必然性の把握を条件として、厳密な仕方で規定されるような「論証的な知識」とは区別しておく必要がある。

この推論において、あくまで論理的には両前提から結論が必然的に導出されることになるが、他方で認識論的には、ある人aが大前提を知っていながら、小前提を知らないような場合には、その人は結論を直接にはまだ知らないことになる。ここには論理と認知の乖離があり、その場合には、知と不知とが互いに相反するものとして同一人物のうちに共存することになってしまうように思われるが、アリストテレスはそうした共存がある仕方では矛盾律に抵触することなく成立可能であると論じようとする<sup>15</sup>。そのためにアリストテレスがT1（67a21-25）の直後に持ち出す道具立ては、知の対象の区別ではなくて、次のような知の様相のまずは二通りの区別である。

T3：(i) 普遍的な知識によって部分的なものを私たちは観て取っている (*τῆ μὲν οὖν καθόλου θεωροῦμεν τὰ ἐν μέρει*) が、(ii) 固有の知識によって知っているわけではなく (*τῆ δ' οἰκεία οὐκ ἴσμεν*)、その結果、それらに関して錯誤に陥るということもあってもよい。ただし、反対対立するような仕方ですうであるのではなくて、普遍的な知識を持っている一方で、部分に関する錯誤に陥ることがあってもよいということである。(67a27-30)

この引用箇所では知の様相に関してまずは、(i)「普遍的な知識によって知っている」と(ii)「固有の知識によって知っている」の二通りの区別しか語られていないが、この十数行ほど後の67b3では、推論の大前提・小前提をともに知っているが結論には至らな

<sup>14</sup> エウクレイデス『原論』第3巻第31定理参照。

<sup>15</sup> それなすことが悪いとわかっていながら、それをなしてしまう、という事態の成立可能性の問題は、現代の分析系の議論がそうみなしているように、「知と不知との共存」の行為論への応用問題としての「アクラシア」問題であり、その点では、スミス (Smith) が示唆するように (pp. 212-3)、アリストテレス哲学内部において『ニコマコス倫理学』第7巻第3章と『前書』B21（あるいは『後書』A1）とは気脈を通じていると言える。

いというタイプの錯誤の可能性を論じる文脈の中で、知の第三の様相として (iii) 「現実  
に活動しているとの意味 (*ὡς τῷ ἐνεργεῖν*) で知っている」というあり方が語られること  
になる。これは、その内容からして、個別的対象の存在に気づいた上で普遍知を個別対象  
へと適用することで個別対象についての結論を導くことであるから、アリストテレスによ  
る合計三通りの知の様相区別のもとで、より包括的に語るならば、「知っている」という  
事態と「知らない」という事態とは次に整理するような仕方で互いに矛盾することなく同  
時に共存可能となる。

知と不知との両立可能性テーゼ：(ある人aが、個別対象に関する結論を、(i) 普遍  
的な知識によって知っており<sup>16</sup>、かつ、(ii) 固有の知識によっては、または、(iii)  
現実に活動しているとの意味では、知らない) ということがありうる。

ここで、前節(第三節)で整理・分析した、アポリアのディレンマとしての議論構造と、  
アリストテレスによるこの解決案との「噛み合わせ」の具合を確認しておくことにしよう。

第一に、『前書』B21 全体のテーマが「錯誤」すなわち知と不知との共存可能性である  
ことにかんがみるならば、先に整理したディレンマの前提1すなわち「人はなにかを知ら  
ないか、知っているかのどちらかである」( $\neg A \vee A$ ) がまずはここでのアリストテレスの  
論駁対象となっていると見てまちがいないであろう<sup>17</sup>。ここでは「知と不知との両立可能  
性テーゼ」がディレンマの二つの選言肢の間をすり抜ける点で効力を発揮することになる。  
そして第二に、この推論においては普遍的な前提がまさに前提として予め知られているの  
であるから、ディレンマの前提3すなわち「知っているならば、学習不必要」( $A \Rightarrow \neg B$ )  
もまた論駁の対象となっていると考えることができよう。したがって、なにか個別的なこ  
とを普遍的な知識によって知っているのだとしても、そこからさらなる学習が成立す  
る余地があることになる。

さて、本論考のこれまでの議論において、アリストテレスが主に『前書』B21におい  
てアポリアの何を問題とし、それに対してどのような応答をしたのかを確認したのである  
から、次節(最終節)では、これまでの議論を踏まえて、『前書』B21と『後書』A1の

<sup>16</sup> フェアジョン (Ferejohn) はここでの知の区別を、大前提の知(普遍についての知)と結論  
の知(個別対象についての知)の区別だと理解する (pp. 41-2)。もしそうだとすれば、ここで  
問題になっている区別は、知の様相の区別ではなく、知の対象の区別だということになる。  
だが、アリストテレスの論旨は同一の対象について知と不知とがある仕方で共存しうるこ  
となのであるから、フェアジョンが採るような読みはアリストテレスのここでの趣旨にはうま  
く適合しない。

<sup>17</sup> ファインは、プラトンによるアポリアの解決が「不知からの探求不可能性」(第三節で整理  
したディレンマの前提2に相当)を論駁対象としていたのに対して、アリストテレスによる  
解決はもっぱら「知っていることを探求することはない」(ディレンマの前提3に相  
当)だけを論駁対象としている、と理解する (p.68)。だが、殊に『前書』B21の議論に関す  
る限り、この章全体の議論の流れを考慮に入れるならば、そのような理解は不十分だと言わ  
ざるをえない。

文脈の異同にも留意しながら、アポリアに対するアリストテレスのこうした応答のさらなる含意を探ることにしたい。

## 第五節 「学習のアポリア」に対するアリストテレスの応答の射程

### 『前書』B21と『後書』A1の文脈の異同の査定（その1）

ともに『メノン』篇への言及がある『前書』B21と『後書』A1の文脈の異同を査定するにあたっては、すでに『前書』B21の議論構造の概略については確認したので、『後書』A1の議論構造ならびに、その『後書』全体における位置付けを確認しておくこともまた必要となろう。

よく知られているように、『後書』A1の冒頭すなわち『後書』の冒頭は、「思考のはたらきによる、あらゆる教授や学習は予め存する知から成立する」(71a1-2) という一文で始まる（これを「先行知の必要性」テーゼと呼ぶことにする）。この冒頭部においても、第三節で確認したような、アリストテレスの「学習」へのシフトを見て取ることができよう<sup>18</sup>。ここで『後書』全体を見渡すマクロ的な視点に立ってみるならば、『後書』冒頭で宣言されたこの「先行知の必要性」テーゼというマニフェストは、『後書』A2以降で展開される「原理からの論証」というプログラムにも反映されていくことになるということがひとまずできよう。というのも、少なくとも、論証の「原理」は、論証に先立ってあらかじめ知られていなければならないからである。それに対して、「探求」がどのようなプロセスをたどって遂行されるのかについては、探求の対象となる四項目が語り出されるその冒頭部(89b23-25)が示唆するように、主に『後書』B巻で語られていくことになる。

確かに、「学習のアポリア」が明示的に語られるのは、この「先行知の必要性」テーゼについての「但し書き」が述べられる文脈(T2を含む71a17-30)においてであって、『後書』のこの冒頭箇所そのものにおいては『メノン』篇への明示的な言及がなされていないわけではない。だが、この冒頭箇所にも『メノン』篇の残響を聴くことは十分に可能であろう<sup>19</sup>。それは、71a11以下で具体的に説明されているように、「語られていることは何か」・「何を意味するか」といった、語の意味についての先行知<sup>20</sup>あるいは学の対象の存在

<sup>18</sup> 『メノン』篇においてプラトンはさしあたり「探求」に関してアポリアを導入した上で、それに対する応答としての「想起説」を語る際には「学習」もその射程に含めることになるが(81d4-5)、それに対して、アリストテレスは『前書』B21と『後書』A1において当該のアポリアをあくまでも「学習」に関するものとして受け取っていることになる。

<sup>19</sup> この点に関する限りでは、すでに第三節で言及したようなチャールズの洞察に基本的には従う。

<sup>20</sup> 『メノン』82b4において「ソクラテス」が、「奴隷の子」を想起説の実験台にするにあたって、その子がギリシャ語を話すかどうかを最初に確認しているのは、『後書』の視点からすれば、語の意味についての先行知の必要性に対応していると言える。また、正方形の倍積問題

や論理規則の成立についての先行知の必要性であり、たとえば、幾何学についてのさまざまな定理を証明・理解するためには、排中律などの論理法則の存在 (71a13-14) や「三角形」の意味 (71a14-15) などを予め知っておくことが必要になる、という教授・学習の成立要件のことである。この箇所をそのように理解することができるのであれば、この「先行知の必要性」テーゼは、先に整理した「学習のアポリア」のディレンマ構造における前提 2: 「知らないならば、学習不可能」( $\neg A \Rightarrow \neg B$ ) に対して、知の対象または内容を区別しながら応答しているものとみなすことができよう。そこで、この論点を比較の軸とするならば、『前書』B21 の文脈が「知と不知の共存可能性」(共時的視点) を関心事とするものであったのに対して、『後書』A1 はむしろ「先行知の必要性」(通時的視点) をそのテーマとしており、ここにひとつの対比を読み取ることができることになる。

しかしながら、これだけではまだ、本論考において『前書』B21 と並んで問題箇所としてきた『後書』A1 の T2 (71a29-30) においてなぜ『メノン』篇が明示的に言及されているのかの謎解きとはならないのであるから、先に『前書』B21 において確認したような個別知が問題となる特殊な文脈に注目した、いわば「ミクロ的な視点」が必要となる。そこで、『後書』A1 において「学習のアポリア」へ直接言及がなされている文脈を改めて確認することにしたい。

### 『前書』B21 と『後書』A1 の文脈の異同の査定 (その 2)

『後書』A1 で「学習のアポリア」が明示的に言及されていたのは、その冒頭部の「先行知の必要性」テーゼにおける「先行知」の具体例 (存在知・意味知) が解説された後で、すべてが「先行知」によって説明されるというわけではなく、「普遍 (全体) の下にある部分についての知は同時に把握する」(71a17-18) という但し書きがなされ、その内実がさらに説明されていく文脈においてである。

そこでもやはり『前書』B21 と同様にまずは「三角形」の事例が挙げられ、「あらゆる三角形が二直角を有することは予め知っていたわけだが、半円に内接するこの図形が三角形であることは、部分を全体に結びつけるべく導かれる (*ἐπαγόμενος*)<sup>21</sup> のと同時に知っ

---

において対角線を補助線として引くことでそこに三角形を見出すのは、半円に内接する図形が「三角形である」と見て取るプロセスに比定することもできよう。

<sup>21</sup> これまで多くの研究者・翻訳者たちは、『前書』B21 の当該箇所 (T1) で語られていた「エパゴゲー」(67a23)、ならびに、『後書』A1 のこの分詞形が、『前書』B23 で語られるような、「個別から普遍へ」と進むいわゆる「帰納 (induction)」のことを意味しうのかどうかを問題とし、なんらか整合的な仕方理解する方途を探ってきた (Ross, 井上、加藤、今井、McKirahan, LaBarge, Bronstein, 金子)。ひとまず翻訳の上では「帰納」という訳語を用いておいて注で内容を説明するという方法もなくはないが、ここで挙げられているのがあくまで幾何学の事例であることからしても「帰納」という訳語を選択することにはやはり躊躇せざるをえない。そこで、ともあれここで問題となっているのが、推論一般ではなく、「全体と部分」という限定された関係であることには間違いないのであるから、ここではこのように訳出しておくこととする。

たのである」(71a19-21)と述べられている。この文脈においてもまた、『前書』B21と同様に、個別対象(この三角形)の存在を知る以前の時点での、個別知のあり方が問題となりうるが、それについてアリストテレスは次のような区別立てを提示している。

T4: 明らかに、[この三角形が二直角を有することを] (i) 限定された仕方で、すなわち、普遍的な仕方で知っているとの意味で (*ὅτι καθόλου ἐπίσταται*) 知っているであって、(ii) 端的な仕方でそれを知っているわけではない (*ἀπλῶς δ' οὐκ ἐπίσταται*)。 (71a27-29)

この箇所直後に、すでに引用しておいた、『メノン』のアポリアへ言及する箇所(T2)が続くことになるが、今、引用した箇所(T4)においてもまたアリストテレスが、『前書』B21と同様に、個別知に関する限りでの「先行知」を否定する一方で、「普遍的な知識によって知っている」という知のあり方を想定していることは明らかであろう。

そこで、本論考におけるこれまでの考察のまとめとして、「学習のアポリア」への対応における『前書』B21と『後書』A1の文脈の異同については次のように言うことができるであろう。

『後書』A1においてアリストテレスは、一方でマクロ的な視点からは、a) 『前書』B21とは異なり、『後書』A2以降でなされるような「論証」のプログラムの提示に先立って、知の対象区別にに基づきながら先行知を要請しているが、他方でいわばミクロ的な視点からは、b) その但し書きとして、『前書』B21とも親和的に、個別知をめぐる知の様相区別にに基づきながら、個別対象に関する先行知の拒絶、ならびに、個別知の潜在性、より正確には、普遍的な知識によって個別対象を知るという認知様相の可能性とを併せて主張していることになる。したがって、『メノン』のアポリア(アリストテレス版ではとりわけ「学習のアポリア」)に対するアリストテレスの応答には以上のような「二段構え」の構造を見て取ることができよう。このような仕方で、『前書』B21と『後書』A1とは同一のアポリア(「学習のアポリア」)の二つのアスペクトに関わっていることになる。

ここで、プラトン解釈において「想起説」が「探求のパラドックス」の真正の解決になりえているのかどうか問題になるのと同様に、アリストテレスによる「学習のアポリア」の解決案に対してもまた、そもそも「先行知」や「潜在知」を持ち出すことがアポリアの解決に本当になりえているのかという疑義が提起されるかもしれない。というのも、アポリアの解決のために「先行知」あるいは「潜在知」を持ち出したところで、結局のところ、その由緒が改めて問われることになるからである。この意味においてもアリストテレスはプラトンの問題を継承していると言えるわけだが、こうした問いに対して現時点で私に答えられるのは、それはアリストテレス自身にとってもひとつの課題であり、その問題に対する一定の応答はひとまず『後書』B19(最終章)においてなされているはずだということである。この点については私自身の今後の課題としたい。

〔主要な参考文献〕

〔欧文〕

- Bronstein, David, ‘Meno’s Paradox in *Posterior Analytics* 1.1’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 38 (2010), 115-41.
- Charles, David, ‘The Paradox in the *Meno* and Aristotle’s Attempts to Resolve It’; in D. Charles (ed.) *Definition in Greek Philosophy* (Oxford, 2010).
- Ferejohn, Michael, *The Origins of Aristotelian Science* (Yale, 1991).
- Fine, Gail, ‘Aristotle and the *Aporêma* of the *Meno*’; in V. Harte, M. M. McCabe, R. W. Sharples and A. Sheppard (eds.), *Aristotle and the Stoics Reading Plato* (London, 2010), 45-71.
- Gifford, Mark, ‘Aristotle on Platonic Recollection and the Paradox of Knowing Universals: *Prior Analytics* B. 21 67a8-30’, *Phronesis* 44 (1999), 1-29.
- LaBarge, Scott, ‘Aristotle on “Simultaneous Learning” in *Posterior Analytics* 1.1. and *Prior Analytics* 2.21’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 27 (2004), 177-215.
- McKirahan, Richard, ‘Aristotelian Epagoge in *Prior Analytics* 2.21 and *Posterior Analytics* 1.1’, *Journal of the History of Philosophy* 21 (1983), 1-13.
- Ross, W. D., *Aristotle: Prior and Posterior Analytics* (Oxford, 1949).
- Scott, Dominic, *Plato’s Meno* (Cambridge, 2006).
- Smith, Robin, *Aristotle: Prior Analytics* (Indianapolis, 1989).

〔邦文〕

- 井上 忠（訳注）『分析論前書』（アリストテレス全集 1、岩波書店、1971年）
- 今井知正「二つの解決策、または提案」、『理想』No. 556（理想社、1979年）、95頁～107頁
- 加藤信朗（訳注）『分析論後書』（アリストテレス全集 1、岩波書店、1971年）
- 金子善彦「アリストテレスにおける個の認識」、中川純男・田子山和歌子・金子善彦（編）『西洋思想における「個」の概念』（慶應義塾大学言語文化研究所、2011年）、11頁～52頁
- 田中享英「「何であるか」の知 - 『メノン』と『分析論後書』 -」、『北海道大学文学部紀要』48-1（1999年）、1頁～32頁
- 渡辺邦夫『アリストテレス哲学における人間理解の研究』（東海大学出版会、2012年）

## 後記

ギリシャ哲学セミナー・第 16 回共同研究セミナーにおける発表（2012 年 9 月 8 日（土）、会場：國學院大学、司会：渡辺邦夫氏）の当日ならびにその後日には、プラトンの「想起説」とアリストテレスの立場との関係、『前書』B21 の議論構造と三通りの知の様相区別ならびに『後書』A1 における知の様相区別との関係、『前書』B21 と『後書』A1 の文脈の異同、「エパゴーゲー」の理解をめぐる問題、『後書』A1 と B19 との関係、『前書』B21 とアクラシア論との関係などの論点をめぐってご質問・ご批判を頂きました。この論文を作成するにあたってはそうした質疑内容を念頭に置きながら内容に改訂を加えるべく試みましたが、本論考においてはすべてのご質問・ご批判に対して応答することはできませんでした。それらの論点については今後の課題としたいと存じます。セミナーの当日・後日にご質問・ご批判いただいた方々には心より感謝申し上げます。